

「私意をはなれよといふ事也」

山本洋子

(晨)

現代における秀句の条件、と打ち出されると、なかなか居住まいをたださねばならないようだが、要は、良い俳句とは何か、ということになるだろう。その答えはしごく簡単。俳句の基本を則とすればよい。

すなわち、芭蕉の「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其の貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る処花にあらずといふ事なし。おもふ処月にあらずといふ事なし。像花にあらずる時は夷狄にひとし。心花にあらずる時は鳥獸に類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり」この『笈の小文』の有名なことばに俳句の礎は言い尽くされていると言える。芭蕉は、俳諧とは、人として生きること、其れ自体であると言いつつ切っている。

なんて古臭い？ とんでもない。私は、俳句の道は、これに極まると思う。

芭蕉の、詩を成す根本の方法についての言葉「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと、師の詞のおりしも私意をはなれよといふ事也」(「あかさかし」)がある。松のことを詠うのなら、自分の我を捨てて松の中に入れ、そうすればはじめて松の情が自分のところへやってくる。

不易なるものは、こういうところから生まれてくるものだと思う。

読んでいて、良いと思う俳句は、やはり「造化にしたがひて四時を友とす」る精神がとおっているもの。作者は、対象に体当たりして、その物の情をつかんでおり、手練手管がない。そう思いつつ作品を読んだ。まず、八十代以上の作家から。



白で来し綿虫青に変わり消ゆ 後藤比奈夫

綿虫の生息がリアルに述べられている。感覚が若々しく思われるのは、率直に、あるがままがいわれているからであろう。

襟に幣挿して早乙女集まれり 皆川鏗水

幣を襟に挿したとだけ言っているだけだが、すがすがしい早乙女のありさまがみえる。具象の力である。

縦縞市の隅で月光売つてをり 眞鍋吳夫

がらくたを並べてある隅にことさらに月の光が照らす。瑞々しいロマンが感じられる。

掃除機が冬至南瓜へよく当る 小原啄葉

大きな冬至南瓜が部屋にころがっている。掃除機に突き当たることで、不思議な現実味がある。自然体こそが真の諧謔につながるものだ。

白雲のまぎれ込みたる野梅かな 深見けん二

野梅にかかわる白雲の動きが、生き物のようにとらえられている。

扇風機提げて出てくる主かな 森田 峠

客人を迎える主の、飾り気なくまめめらしい気働き、風情あり、日常から生まれた諧味。

太古より焚火を囲みいくさうた 和田悟朗☆

焚火に照らされた面々。焚火に、幾多のつわものどもの闘志を映してきた火の赤さをみる。

以上、八十代の俳人には、各々の俳句へのゆるぎない信念がある。そこにすこしも古風なものはなく、恬淡とした感受性と若々しさをも感じる。

鴨眠るひとつの波をひきながら 今井杏太郎

一つの波が湖上のしずけさにいる鴨の姿をみせる。

夏夏と過ぎゆく時や朴の花 金箱戈止夫

すぎていく時間を音で表現するとあまりにも早く、強い。「夏夏と」は朴の花の神聖な白さに映える。

白魚を食ひに下着を替へて出る 鈴木鷹夫

食べ物が詠まれているのに、ここに清潔なエロスの醸しだされる不思議がある。

酸素噴く音の中なる初明り

綾部仁喜

病床にいる身を囲むさまざまな管。なかでも酸素を噴きあげている機械は、確かな音をたてて我が生命をささえてくれている。そんな音の真直中で初明かりを感じる。いま一番我が身をいかしてくれているのは、この初明かりだと気がつく瞬間。

桃の花ひゆるひゆる風の鳴る日あり

廣瀬直人

土地の濃い情感が活き活きと伝わる。

上州や月がのぼれば草の影

大塚あきら

上州の月の出。あたりの小草にも土臭くて孤独な影をみる。作者をとりまく自然のすべてが、対話を誘っていることを思う。へ春の閑林泉にゆきわたりたる庭の隅々にへゆきわたりたる春の閑は、深く濃く、美しい。

天井の染みのうれしき帰省かな

黛執

懐かしいふるさとの我が家での楽しみは、畳に大の字に寝ること。天井の染みの発見に現実味がある。

起ちたらば頭つかへん天の川

宗田安正

天の川がどんなに近々とみえているか、その驚きが素直に述べられている。

梅雨豪雨あがり瑠璃沼氾濫す

岡山日郎

〈瑠璃沼〉の〈瑠璃〉の二文字が効く。

冬深しときどき夢に驚いて

矢島渚男

冬が深まって、なにも動きのない世界に、夢に驚いてみじろぎするのは、鶏でも、人、我でもいい。特定していないところに、大きく冬深まるの感がある。

やはりというべきか七十代の男性の作家に、一段の覇気をみる。伝統としての文芸をここに究めていかんとする意思がみなぎっていることを感じる。

八十代、七十代の男性の俳句をみることにすっかり頁を費やした。あとに注目句をひく。

火祭の夜にて大きな握り飯

成田千空

天草の春の入日を見送れり

藤本安騎生

身に纏ふものの順序や着衣始め

宮津昭彦

風の日は風のいろなる冬木の芽

吉柳志解樹

子曰くと教へて祖父の年始め

有馬朗人☆

初鶏や雨戸にむかし節の穴

鷹羽狩行☆

寒禽の翔つ素早さに翳もなし

辻田克己

大夕焼泳ぎ疲れしごとく居り

岡本 眸

鷹一つ紺を張りあふ空と海

鍵和田柚子

鶏を抱ふる少女春の雲

茨木和生

片蔭を出て連れのはなきこと思ふ

棚山波朗

身の文を揃へて二人静かな

倉田絃文

白描をもて一幅の雪解富士

行方克己

憂国忌鷹を生捕りしてきたり

伊藤通明

旅立ちの色整えよ冬の草

宇多喜代子

茶柱が立つたり鶯が来たり

大石悦子

点る灯の揺れざるはなし年の果

永方裕子

草刈つて故郷大きくなりけり

小島 健

月光の分厚きを着て熊眠る

高野ムツオ

つぎつぎと波あたらしき桜貝

正木ゆう子

足あとのその先にひと春渚

片山由美子

住み替へて又も草の戸鳥雲に

三村純也

市振の畑打ちひとり夢にまた

津森延世

冬の夜や玩具に残る子の匂ひ

田中春生

ゆふかぜに頭吹かれて燕の子

井上弘美

形代を流す一葦も流さるる

西村和子

直立の菊人形に囲まるる

奥坂まや

海に入る直前冬日拡がれる

小澤 實

早々に香水園を立ち去らん

加藤静大

松手入本因坊が眺めけり

野中亮介

いつよりを恋人とよぶ後の月

蘭草慶子

宝貝ならべて東シナ海とする

五島高資

こうして若い年代までの俳句をみてきて、改めて、俳句の新しいとは何だろうと考える。やはり最初にかけた「松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ」のところで、ものの真髄をさわめることこそ、真にいたりつく、また美なるものをみいだすべき道だと言える。つまりは、変わらぬものを究めることも新しきをもとめることも一つであるのだ。

新しきをみつけるとは、この世情にあわせるのではなく、自分の個性を殊史に出すことでも、また奇をてらうのではない。我を捨てて深く内をきわめることである筈である。そうすれば、その人自身があらわれてくる不思議がある。新しきとは、自分のまだ知らない自分に出あう事かもしれない、そうも考えられる。永遠性と新しきと、この二つながらに有る詩をもとめる私どもの努力は果てることを知らないだろう。

*注記 ☆は同年鑑の「年代別二〇〇五年の収穫」より抽出

俳句有情

中嶋鬼谷

(雁坂・晨)

秀句とは、過去現在の別なく、個々の得た感銘が他者の感銘と響きあう普遍性を持ち、さらに、読むたびに新しい相を現す作品である。例えば、

遠山に日の当りたる枯野かな

虚子

この句が時代を超えて共感を得てきたのは、誰もが体験した光景であるのに、誰も言い得なかったことを平明に、かつ晴朗なりズムで表現しているからである。仮に、そのままの光景を体験したことがなくとも、体験したことがあるかのような想像力をこの作品によって喚起されるからである。

読者に感銘を与える俳句は、人々が詠うことを始めて以来、連綿として流れ続けるゆたかな詩情を湛えている。この虚子の句も、

山は暮て野は黄昏の薄哉

蕪村

の景をネガティブにし、遙かより蕪村の句に流れついた詩情を汲みあげたものである。この詩情は、四季の

ように、冬枯の万象がこの世ならざる微光に包まれている。美しさに昇華された悲しみ。絶唱である。

ふるさとの夜長を思ふ夜長かな	大串 章
不幸なる生ひ立ちに似て冬の貨車	大牧 広
大夕焼泳ぎ疲れしとく居り	岡本 眸
あゆみけり吹雪のやうな猫を抱き	檀 未知子
旅こまでおのづと見えて雁の道	齋藤慎爾
たましひの明るくありぬ枯木山	宗田安正
まいにちが初めての年暮れにけり	千葉皓史
かの遺書は冬の銀河を流れぬむ	友岡子郷
亡きははが障子をあけず入り来し	八田木枯

二、生命有情

曇る日の我をみあげていばむしり

大木あまり

以前、テレビで野鳥研究家の中西悟堂の肩に野鳥が飛来しては去る映像を見た。病弱の体質をなおすため、十歳のとき秩父の寺で百五十日間にあぶ坐行、断食の荒行を積んだ人である。彼には自然と対話しようという「意識」がない。だから小鳥が来るのである。

大木あまりにもこの意識はない。やって来た燕に、同

変化に富む島国に太古より暮らしてきた人々の自然への祈りが育んできたものである。蕪村も虚子も山を見つめながら、そこに神を感じていたに相違ない。

ともかく、感銘はまず「個の感銘」である。以下に挙げる諸句は「私」が感銘をうけた有情の作品である。秀句であるか否かは歴史の判断にゆだねるしかない。

一、人生有情

母逝きて風雪枯木なべて美し

金子兜太

作者の御母堂は平成十六年暮に百三歳の長寿をまつとして世を去った。長寿の人の死に際し、作者の故郷秩父の人々はその人生を讃えて赤色を交えた五色の幟を立てて野辺に送る。

掲出の句も、心に五色の幟を掲げて御母堂を讃えたものであろう。死者の魂が光となって現世に残るかの

生き物として「お帰りなさい」と挨拶するのみ。病気のため入退院を繰り返す身であるという。勁節、孤愁の人の詩心は俗塵を離れてますます澄み渡ってきたようである。掲出句から、「こんにちは」と、蟬に挨拶している作者の姿が見える。《曇る日の》が抜群の措辞。

山中の仲良きものに藪柑子	青柳志解樹
空蟬の中の幸いなる空	池田澄子
母の手に赤子をもとす牡丹かな	大塚あきら
合掌す千のつぐみの渡り見て	木田千女
をさなごに聞あたらしき蜚かな	辻美奈子
しやばん玉生まれくるものみな濡れて	中嶋秀子

三、乾坤有情

うりずんや波ともならず海ゆれて

正木ゆう子

「ウリズン」は沖縄・奄美地方で旧暦二、三月の頃のこと。新暦の三月末から穀雨にかけての季節にあたる。大和國家の垂直的世界観とは異なり、沖縄、奄美の世界観は水平的なもので、海上遙かな「ニライカナイ」は、生者も死者も自由に往来できる楽土。《波ともならず海ゆれて》——喜びを踊で表現する南の島の人び



と、その祖霊たちの踊のゆらぎのように、ゆたかにゆれる海は祖霊の海である。神の宿る一句というべきか。

大鳥の影空にある酷暑かな 綾部仁喜
おぼろのしづけさに朴ひらきけり 井上弘美
浮く雲に歳月はなし枯木立 大井雅人
小春日やその夜まどかな月の暈 岸本尚毅
日が差せばまはり無数の雪蟹 齊藤美規
船二つ離れて灯る梅雨入かな ながさく清江
あたたかや海を蹴りゆく蛸の足 野中亮介
冬の月あまり高きをかなしめり 山本洋子
若竹や雲に力の満ちて来し 鷺谷七葉子

四、世上有情

おちぶれて二十世紀の案山子

津田清子

人口の爆発的增加により、二〇五〇年には確実に世界規模の食糧危機に見舞われるといわれる時、我が国の田畑は荒地と化しつつある。里山を守れという声も高まっているが、里山は農家が、すなわち案山子翁が守ってきたのだ。作者の怒りと嘆きが伝わってくる。

六、滑稽有情

母の日の地球を雲の母包み

辻田克巳

母の白く柔らかな胸が嬰兒を抱くように、雲が地球を包んでいる。こんなに愛くるしい地球が俳句に詠まれたことがあったか。雲に乳の匂いまでする。一読して浮かぶ仄かな笑い。これが滑稽というものである。

むかご飯粒不揃ひは仕方なし 森田 峠
寒き日の細羊に脚出てゐたり 矢島渚男
ゴム緩きすててこを上げ月の人 山上樹実雄
話し声地球を出でず冬銀河 和田悟朗

七、愚説有情

故郷とその自然によって培われた飯田龍太の詩情の最も純化されたものが次の一句。

一月の川 一月の谷の中

龍太

『飯田龍太全集』で龍太の俳句や随想を再読し、改めて右の一句に返った時、気づいたことが一つある。龍太における漢詩文の影響ということがある。明治の文人が漢詩文を我がものとしていたことは周知の通

「憲法を変えるくらゐ」六林男の計 大井恒行
日本に米軍がある暑さかな 角川春樹
地が呑みし血の量サ思へ年送る 高橋睦郎
気がつけば頭上に国家雪催 仲 寒蟬
薄氷の日暮にひかる過疎の村 中 拓夫
ずたずたの大地に我ら去年今年 長谷川 権
牡蠣吸る地球に瓦礫また瓦礫 山下知津子

五、日常有情

葱抜いて四日の土間を汚しけり

皆川盤水

新年の瑞祥の気の漂う土間にこぼれた土塊。土にまみれた葱に新春の香が潑刺と立つ。〈汚しけり〉に、この日が仕事始の日であることを改めて教ええられる。〈四日〉が微動だにしない。歳時記の例句などにこれを超える「四日」の句があるだろうか。

干布団けはしき顔にしまはるる 石田郷子
パンク穴より早春の泡の列 今井 聖
三月の土棒で掘り両手で掘る 山西雅子
やはりある白夜の煙突よりけむり 依田明倫

り。男の文学であった漢詩文を俳句の世界で縦横に駆使したのは蛇笏であろう。辞世の句を見れば一目瞭然。

誰彼もあらず 天白尊の秋

蛇笏

龍太が蛇笏の漢詩文的文体の影響を受けなかったなどまず考え難い。一月の川 一月の谷の中は、あたかも漢詩を読み下したとき声調を帯びた俳句である。

ところで、俳句における漢詩文の影響は龍太の世代で終わったのではなからうか。その影響が薄らいだ時、堰を切ったように台頭してきたのは仮名文を伝統的に身につけてきた女性たちであった。現代俳句の流れに一線を画するとすればここであろう。かくして俳句ブームが現象し、あまたの優れた女流が登場してきたが、男女を問わず俳句の散文化も同時に進行し、小林恭二風に言え「楷書の基礎のない草書のような俳句」の簇出も見た。一方で韻文精神が叫ばれ始めたが、形式的に「切字」の多用を以てすればよいわけでもない。俳句の歴史は、ゆたかな詩情を湛え、凜とした韻をもつ俳句を今日に伝え、新しがつていた奇手奇才ほど早くほろびたことを教えている。秀句の条件に過去も現在もない。現在のはたちまち過去となるからである。